

## 結 語

人間行動の方向づけ、開始、変容に影響を与えるものは何か。われわれはまずその外的要因を、有名人の自叙伝を利用して探ってみようと試みた。行動に影響を与える外的要因も、いろいろな角度から求められるであろうが、親・教師が操作し易く、しかも行動の方向づけ、開始、変容に重要な影響を持つものとして、一応九個の要因を捉えてみた。本研究の前半、すなわち前稿〔I〕<sup>9)</sup>においては、そのうちの親、教師など主として身近かの人間による影響を、後半においては事件、ある種の機会、内外情勢など、人間自身というよりも人間の作り出したものの影響を取り上げてみた。そしてそれらのものの影響から、だれがどのような行動を起こしたか、各要因別にいくつかの例をあげてみた。

しかし、影響的な外的要因がそろってさえいれば、常にこれらの例のように行動の変容、開始などが起こるかという、必ずしもそうとばかりは言えないであろう。なぜならばその場合、外的要因とかみ合わさるべき内的要因の重要性も無視できないからである。行動は常に外的要因と内的要因のかみ合わせによって起こるものであるが、今回は外的要因の探求のみに止めた。内的要因の探求については次の機会に譲ることにする。

なお本稿で使用した自叙伝及び参考文献は、前稿〔I〕の場合と同一である。

- (注) (1) 福田英子「妾の半生涯」岩波書店、昭33、94-96。  
(2) 大杉 栄「自叙伝」岩波書店、昭46、112-114。  
(3) A. カーネギー・坂西志保訳「カーネギー自伝」角川書店、昭42、81-82。  
(4) 福沢諭吉「福翁自伝」岩波書店、昭29、99-100。  
(5) 荒畑寒村「寒村自伝」筑摩書房、昭40、45。  
(6) 同 上、45-46。  
(7) 熊谷寛夫「実験に生きる」中央公論社、昭49、20。  
(8) 福沢諭吉「福翁自伝」岩波書店、昭29、202。  
(9) 「文芸と思想」第40号、昭51、83-97。

そして更に、シュレジンガーの読む人をして納得させずにはおかぬ明快な、しかも、鋭い論法で迫ってくる“波動一元論”は、全く湯川をして新量子論のとりこにしてしまった。

更に、湯川に新量子論と取り組むことを決定的にさせたものは、やがて大学3年生となり、だれかひとりの先生につかなければならなくなった時、玉城研究室に入ることが許可されたということである。それは他の研究室と違って、同研究室には自由の雰囲気横溢しており、しかも理論物理学一点張りで、当時としては、時の世界の潮流に思う存分身をひたして、新量子論と取り組むことの出来る条件がそろっていたからである。

## 例2 福沢諭吉の場合

福沢諭吉は官軍と幕軍の戦いが、江戸の市中でまだ行われているさ中に、何れの側にも立たず、彼独自の考えで、国の将来を荷う人士の育成のために、慶応義塾を創立した。狭い国土の中で、同じ日本人がいつまでも二派に分かれて相争い、学問と言えこれまたいつまでも漢学と蘭学。西洋文明の潮流は、いつまでもこのようなことをしている間に、日本を置き去りにして、はるか先の所を流れていってしまっている。この潮流に何としてでも追いつき、日本にも文明開化の花を咲かせ、そして日本を彼らに劣らぬ富強国にするのには、そのための人士育成の学校を作らなければならない。こう考えて彼の作った学校が、慶応義塾であったのである。

このようなわけで、塾で使用する教科書は、彼がアメリカから持ち帰った英語の書物ばかり。塾生とて入学を許可したものは、官軍方、幕軍方を問わず、福沢の建学の趣旨に賛成するものすべて。教育の方針は、自然の原則に重きを置いて数理を基にし、また道徳的には、人生を万物中の至尊至霊なるものと認めて、その独立を強調、一面、大学運営に当っては、授業料を徴集したり、また漢学流の虚礼を廃したりもした。例えば塾中で行きずりの時に交す師弟の敬礼すらも、次のような掲示を出していらざることとした。

“塾中の生徒は長者に対するのみならず相互の間にも粗暴無礼は固より禁ずる所なれども、講堂の廊下その他塾舎の内外往来の頻繁の場所にては、仮令ひ教師先進者に行逢ふとも丁寧に辞儀するは無用の沙汰なり、互に相見て互に目礼を以て足るべし。益もなき虚飾に時を費すは学生の本色に非ず。此段心得の爲めに掲示す。”<sup>8)</sup>

その他当時の福沢の行動には、彼なりに時勢を捉えて、その先端を行く行動が多かったように思う。

の間隔を数個含むような振動に対しては、重い均一な紐のように作用するだろうし、散弾が取り付けられていない場合よりも、ずっと能率的に糸の一端から他端へ、これらの運動を伝達するだろう。”というのであった。

彼は帰学後、その装置を使っての実験を振り出しに、電話線にインダクタンス線輪を取り付けての実験に至るまで、数多くの実験を行ない、やがて装荷ケーブルの特許を得たり、更にそれは無線電信の電気同調と電気整流に関する発明へと発展していったのである。

科学の発明発見には突然何かひらめき、それから得たヒントを発展させて、素晴らしい発明をしたり、発見をするということがよくあるが、ピューピンの場合もそれである。

例4, 5はある機会に突然何かを思い付き、それをするようになった場合の例である。

**5** その時の内外情勢から、あることに強い興味を持ち、ついにはそれをするようになる場合

#### 例1 湯川秀樹の場合

湯川秀樹が大学で理論物理学を専攻するようになったのには、いくつかの理由がある。もともと数学や物理学が好きだったことも、その一つの理由である。しかし、それが物理学をするようになったのには、もう一つの理由があるようである。それは高等学校時代の数学の先生が、数学の問題を解くのに、自分の教えた方法以外で解答を出しても、その先生は正しい解答としては認めてくれなかった。その結果、立体幾何の1年の一学期の成績は、落第点を取るようなことになってしまったのであるが、先生のそのような教え方が気に食わなかったことと、落第点を取ってしまったことから数学は嫌いになってしまい、そのため、将来とも数学者にだけは絶対になるまいと決心したのである。そして物理学に行くようになったのであるが、更に理論物理学に行き、量子論をやるようになったのは、実験が苦手だったこと、理想と現実との間の矛盾の解決のために、思考に思考を重ねていくということに得も言われぬ快感を感じていたことと、更に次の理由によるものであった。

大正末期は有名な物理学者、例えばマックス・ボルン、ハイゼンベルク、ヨルダン、シュレジンガー等により、旧量子論は新量子論へと書き換えられつつあり、新量子論の当時の物理学界に与えた影響は、むしろ驚天動地のものであったと言っても過言ではないくらいであった。湯川は大学へ入学して間もなく、まずマックス・ボルンの“原子力学の諸問題”によって強い影響が与えられた。

このようなわけで末川の場合は、もしも卒業式のすんだその日の夕方に、友人とのお別れの会食がなかったら、あるいは高等学校は一部ではなくて、他の部へ行くというようなことになっていたかもしれない。

以上の例1, 2, 3は偶然のことから、あることをするようになった場合の例である。

#### 例4 ミル (J. S. Mill) の場合

ミルの数多い著作のうちでも、彼自身が非常にその重要性を認めているものに、彼の“自由論”がある。この“自由論”は人間の性格にはいろいろの型があるが、どの型のものも自由に伸びることのできるような社会にしてこそ、初めてその社会の進歩も、個人の進歩も可能となるのであるという考えを基にして、当時強まろうとしつつあった言論と行動の統制に、強い反対を表明したものである。彼の考え方は初めこれをエッセーの形で表明しようとして計画し、そのつもりで執筆も始めたのであるが、その計画を急に変更して、一巻の書物として書き改め出版しようとするようになったのは、1855年1月イタリアを旅行し、ローマの議事堂の石段を登りつつあった時であったという。石段を登りつつあった時に、どういふことが機縁になってそうしようと決心したのか分からないが、とにかく突然何かひらめくものがあったのであろう。

#### 例5 ピューピン (M. Pupin) の場合

ピューピンは1894年の夏の前半、大学における講義の準備のため、スイスのバンネンゼー湖畔の小さなホテルに滞在していた。滞在中ひまがあるとラグランジュの解いた有名な古典的問題についても、何とはなしに考えていた。ラグランジュの解いた問題というのは、重さのない紐をバイオリンの絃のように、固定した二点の間に張って、狩猟用散弾のような重さの等しい重りを等間隔に付ける。そしてもしこの紐が衝撃を受けた場合、どう振動するだろうかという問題である。

ある時、やはりこの問題について考えながらジグザグの峠道を、妻は自動車を運転し、自分は時に妻の車から下りて、一人で近道しながら歩いていたのであるが、何回目かの近道をしている時、突然何かひらめくものがあった、この問題の答は電気運動にも応用できるに違いないと考えついた。そうすると妻の車に乗っても、妻の語り掛けなどほとんど耳に入らず、峠の展望台から眺める絶景も何らの感動を与えるものとはならず、とにかく、コロンビア大学の彼の実験室に一刻も早く帰って実験したくて仕方なくなってしまった。その時彼の頭の中に一応建てられた仮説と実験装置は、“固定した二つの点の間に張られ、等しい重さの散弾を等間隔に取り付けられた軽い絹糸は、その波長が、散弾間

ようになった直接の切っ掛けとなったものは、高等学校卒業の少し前に、彼の心に強い印象を与えた郷里松本の風景であったと言う。その時の印象は余ほど強かったのであろう。彼はその時のことを、次のように書いている。

“高校卒業の前の秋に、松本を流れる川の岸で、青い空、白い雲、美しい山を眺めながら、自然の神秘に立ち向かうことにしよう。自然科学者になって、社会改良の問題には余り立ち入らないことにしようと決心した。そしてその代償として自然科学の研究を自分のためにするのではなく、自然科学の進歩に貢献する立場を守ろうと考えた。……

自然の神秘をさぐる決心をしたあと、二、三ヶ月たって、物理学を一生の仕事にする決心をした。工学部に入って電気工学を勉強するつもりでいたのを、大学に入学願書を出す直前になって志望を変えて物理学を選んだのは、なるべく自然を根本的な立場からさぐりたいと考えたからである。”<sup>7)</sup>

その後彼は、理論物理学よりも実験物理学を選び、戦中から戦後にかけて、中性子の研究から油回転ポンプ、レーダーの研究へと手を伸ばし、応用物理学の分野でも大きな貢献をしたのであるが、そもそも大学で物理学を専攻しようとする直接の切っ掛けとなったものは、高等学校時代に眺めた大自然の美しさと、その神秘さであったのである。

### 例3 末川 博の場合

憲法、民法の大家と言われた末川も、大学に進学するに当って何れの学部にするべきか迷った時代があった。中学校から高等学校へ進学する時であるが、大学の学部をどこにしたらよいかによって、高等学校における入学先も変わってくる。ある先生からは理工科系へ進めと言われ、ある先生からは法科か文科へ行ったらどうかと言われ、彼自身の心中には従兄が高商出だったので、高等商業も悪くないという気持があり、さてどちらにしたらよいかと迷っていた。その後次第に日もたって、中学校の卒業式のあったその日の夕方のものであったが、親しい友人7、8人とある料理屋で、それぞれ勝手なことを言い合いながら、中学校における最後の別離を惜しんでいた。その席でこれから後どうするかというようなことについても、皆が自分のこと、人のことについて、それぞれ勝手なことを言い合ったのであるが、末川のことについては皆の意見がほとんど一致して、法科へ行くのが一番ふさわしいのではないか、ということになってしまった。もち論確実な根拠があって言っているのではなくて、その場の雰囲気皆が調子に乗って、ただ言っているのかもしれないが、そう言われてみるとそうかもしれないという気になって、高等学校は一部へ行くように決まってしまう。

これはあることをしようと初めから計画を立てていたわけではないのであるが、あることをしている時に偶然何かを見て、結局それをするようになったり、突然あることが頭に浮んで、それをするようになったりする場合である。

#### 例1 ダーウィンの場合

ダーウィンは1872年、有名な“人及び動物における情緒の表現”と題する著作を発表しているが、これはその進化論的見地から人間の表情について書いたものである。情緒と表情との関係について論じている著作は、彼の前にも後にも数多くあるが、彼以後のもので、彼のこの著作について言及していないものは一つもないと言ってもよく、現在でもこの分野では、まず読まなければならないものとされているほどのものである。

ところで彼のこの書物は、どのようなことがその切っ掛けとなって出来たものであるかと言うと、彼は1839年彼の最初の子供が生まれた時、その表現する複雑な表情を見ているうちに、情緒と表情との関係についても、進化論的見地から研究してみようと言う興味がわいてき、始めたものであると言う。ダーウィンには、このような偶然の機会にあることを見聞して非常に興味を感じ、そのことについて研究を始めたという研究がいくつもあるようであるが、次の例もその一つとしてあげることが出来る。

1860年の夏にハートフィールド附近を散歩している時、モウセンゴケが沢山生えているのを見付け、しかもそのモウセンゴケの中には、葉で虫を捕えているのがあるのを見付けた。非常に興味を感じ、モウセンゴケはどのようにして虫を捕えるのか、虫捕りのメカニズムを調べてみようと思ひ、何本かを家へ持って帰って、触毛の運動を昆虫を与えながら調べてみた。そして更に決定的なテストとして、同一濃度の窒素を含む液体と、窒素を含まない液体につけた場合とを比較してみると、前者の場合だけが強力な触毛運動が起こることが判明した。その後多くの実験を重ね、結局、植物が特有に興奮させられた時、動物の消化液と非常によく似た酸と酵素を含む液を分泌すること等を発見し、1875年“食虫植物”を発刊した。

ダーウィンの学術上の発見で、偶然の観察がもとになって、それが発展して画期的な研究になったものは、これら二つに止まらず、その他いくつもあるようであるが、ダーウィンと言わず自然科学の分野では、このようなことは多いように思う。

#### 例2 熊谷寛夫の場合

熊谷寛夫は、日本の現代原子物理学の上に、戦中から戦後にかけていろいろな貢献をした人であるが、彼が自然科学者となり、特に物理学をやろうとする



横浜での経験から、これからの日本の発展には英語が必要であり、自分たちも英語を勉強しなければならない、ということを痛感したのである。諭吉はその時のことを次のように語っている。

“今まで数年の間死物狂いになって和蘭の書を読むことを勉強した、其勉強したものが今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことが出来ない、左りとは誠に詰らぬことをしたわいと、実に落胆して仕舞た。けれども決して落胆して居られる場合でない。彼処に行れている言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。所で今世界に普通に行れて居ると云ふことは予て知て居る。何でもあれは英語に違ひない、今我国は条約を結んで開けかゝって居る、左すれば此後は英語が必要になるに違ひない、洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない、此後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰った翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を発して、夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極め”<sup>4)</sup>、英語の勉強を始めた。しかしよい先生がいるわけでもなし、随分苦労したようであるが、英語を身につけ、蘭学とは違った方向から洋学を勉強し、追い付いていこうとしたのである。

福沢はこのようにして、今まで勉強していた蘭学から英語の勉強へと移っていったのであるが、その切っ掛けとなったものは、見物に横浜に行ったということである。

### 例3 荒畑寒村の場合

強い忠君愛国主義思想の持主だった寒村が、16才前後から社会主義思想の持主へと変っていくが、そうなっていくの一番大きな影響を与えたものは、彼が横須賀海軍工廠の職工となって、苛酷な労働を自ら体験したということであった。

彼は高等小学校を出ると、すぐ自分で探してきて横浜のある外国商館のボーイになったが、慣れるに従って、次第にその仕事にも飽き足らなさを感ずるようになり、そうかと言って、また父の職業（遊廓経営）に対しても、彼のピューリタンの性格から、これを継ごうなどという気持は全く起こって来ず、これからどうしたらよいか、15、6才のころは自己の将来を盛に模索していた。

そのような時、彼は海軍大尉郡司成忠の報効義会が少年隊を千島に送って、島の開拓と北門の防備に当らせようとしていることを知った。そこでさっそく東京の郡司宅に至り、是非参加させてもらいたいと頼んだところ、郡司会長から占守島に行くにしても、まず何か職業を身に付けてからにする方がよく、君がもし筋肉労働的なものを望むならば、ラッコ猟の船に乗る関係から、船大工などはいかがかと勧められた。そこで会長の口ききでその船大工の技術を身に



た。彼から一応の報告を聞いてから後も、自分の領分を越えて指令を出し、列車を動かしたことについて何も言わなかった。その後スコット氏が列車の運転について、自ら指令を出すことはほとんどなくなった。間もなくカーネギーは主任に抜擢された。

### 3 あることをさせられたり、ある機会に待たされたりすることの影響

自らの意志ではなく、せざるを得なくてあることをしたり、させられたりしているうちに、そのことに次第に興味を感ずるようになり、そのことをついには進んでするようになってしまう場合である。

#### 例1 柳田国男の場合

柳田国男は幼時から、日本の古い伝承や、慣習に接することが非常に多く、それらのことから自然に将来日本の民俗学者として進んでいく素地が作られていったように思う。

5才のころ二度も村の結婚式で、三々九度のお酌をする男蝶の役をしたことがある。それは面倒な言葉をうまく言うことが出来るということと、袴を持っているということのためであったが、その時した男蝶の動作は、非常に鮮明に印象として残り、後に日本婚姻史を書いてみようとする大きな原動力となっていたのである。

柳田の故郷、兵庫県神東郡田原村辻川にも麦搗き歌があった。麦搗きの季節になると屈強の若者たちが、大屋の広庭を借りて夕方から徹夜で麦を搗く。その時歌う歌が麦搗き歌であるが、その時見聞した情景が、長く脳裏にこびり付いて、これが日本全国における麦搗き歌の蒐集と、その研究へと発展していったのである。

柳田の民話の研究も、子供の時よく聞かされた“大屋の横行き話”がそのもとであったというし、稲荷信仰の研究も、子供の時から親しみを持って接していた郷里辻川の森の稲荷様の祠や、その祠にまつわる狐に関する伝説がもとであったという。

#### 例2 福沢諭吉の場合

諭吉は大坂の緒方の塾で蘭学の勉強をしていたが、江戸の奥平の邸から蘭学の塾を開くに当り、呼ばれて江戸に行った。

ある日、歩いて横浜見物に行ったが、実に落胆してしまった。そこで店を出している外国人の店の看板を見ても、何て書いてあるのかさっぱり分からない。外国人と話をしても、先方の言うことも分からなければ、こちらの言うことも通じやしない。結局、そこで使われていたのは英語であったのであるが、この

しかし、気持の上ではそのようになりながらも、この事件の禁足が解かれ学校へ帰ると、また残念ながら“狂暴の病気”が出、友人と決闘し、揚句の果は退校ということになってしまった。しかし、退校後一時郷里に帰ってはいたが、学問にひかれる気持また強く、両親に頼んで東京に出させてもらい、下宿住いをしながら予備校やフランス語学校へ通った。親もとを離れ、上官からの拘束もなく、“自由”を満喫しつつ、ただ夜も昼もなく夢中になって勉強したが、その時以来このような自由は、ただ自分だけに必要なものではなく、理論づけられてすべての人に与えられなければならない、と次第に考えるようになっていった。このような時に理論的、思想的に彼を導いてくれたものが万朝報であり、そして特に同紙に載る秋水等の論文には、胸の底から強く魅せられていったのである。

大杉の社会主義者としての出発に当っては、前記のようなくつかの突発的な出来事が、やはり一つの大きな契機になっていることは、争えぬ事実であると思う。

次の例は、何か突発的な事件や事故があると、自分の仕事の上での領分を越えて、積極果敢に行動していくという場合である。突発的な事件や事故の時、狼敗したり、あるいはショックで何ものなし得ないものもあれば、そのような時にこそ真価を発揮し、積極果敢に行動して上役に認められて、昇進のチャンスをつかむものなどいろいろある。

#### 例2 カーネギー (A. Carnegie) の場合

カーネギーは18才のころから、ペンシルバニア鉄道会社の事務員兼通信技手として勤務していたが、ある朝事故が起こり、鉄道が混乱した。その時彼はどのように対処していったか、彼は次のように語っている。

“ある朝私が事務所へ行くと、東部管区に大きな事故があって、下りの急行列車がおくれ、上りの客車は全線に配置された信号手の指図によって徐行しているのを発見した。上り下りの貨物列車はみな退避線で止まっている。スコット氏（ペンシルバニア鉄道会社監督）はどうしても見つからない。とうとう私は全責任を負って指令を出し、事態を処理することに決意した。死ぬか生きるか運命の別れ道だ、と私は自分にいってきかせた。職を免じられ、面目を失い、もし間違えば法に問われるかもしれない。であるがもしうまくゆけば、一夜中待機している疲れはてた貨車の乗務員を、連れもどすことができる。……私はどうすればよいのかよく知っている。それで私は仕事にかかった。私はスコット氏の名で指令を出し、全線の列車を動かし始めた。”<sup>3)</sup>

スコット氏が事務所に着いた時には、列車の混乱は順調に解消されつつあっ

若さで実業家としての生活に終止符を打ち、その後はそれまでに築き上げた資産を投げ出して、幼年時代からの夢を実現すべく、ギリシア古代史に語られたイタケー、ペロポネーソス、トロイア、ミュケーナイ等々の遺跡発掘に従事したのである。

彼を世界の発掘王とまで言わしめるようにしたのは、幼時から持ち続けて来たギリシア古代史への強い関心とともに、発掘に使われる莫大な費用を、彼は独力負担することができたこと、それは多分に彼の素晴らしい語学力に依存するものであったが、これら外国語の修得と言い、費用の自弁と言い、それらの基になっていたものは、彼が病気で店をやめさせられたことにあったと思うのである。

## 2 突発的な事件の影響

突然発生した出来事も、事と次第によっては、深刻な影響をその後の行動に及ぼすものである。

### 例1 大杉 栄の場合

大杉 栄の陸軍幼年学校時代、全校生徒による大和巡りの修学旅行があった。まだ腕白時代のこと故、何かにつけ上級生の下級生いじめということはよくあったものであるが、吉野の寺に泊った時も、大杉たち上級生の下級生襲撃事件があった。このことは運悪く係りの軍曹にすぐ見付けられ、将校会議の結果、大杉は禁足30日という懲罰に処せられた。このことが大杉のその後の行動にどんな影響を与えたか、彼はこう語っている。

“僕はこの懲罰がどうしてあんなに僕を打撃したのかよく分からない。僕は生れてはじめて、そしておそらく絶後であろうと思うが、本当に後悔した。30日間の禁足をほとんど黙想に暮らした。そして従来の一変することに決心した。……

僕はこの植物園の中を……歩き暮した。そしてたえず今までの生活を顧みながら考えていた。この反省はさらに、僕を改心というよりもほかの、他の方向へ導いていった。それは僕がはたして軍人生活に堪え得るかどうかということであった。……この下士どもの下に辛棒ができるかと思った。彼らを上官として、その下に服従して行くことができるかと思った。尊敬も親愛もなんにも感じていない彼らに、その命令に従うのは、服従ではなくして盲従だと思った。……僕ははじめて新発田の自由な空を思った。……僕は自由を欲しだしたのだ。”<sup>2)</sup>

彼の自由を求める気持は大町桂月、塩井雨紅等の著作の影響もあって、この事件以来非常に強くなっていった。

あるとともに教育の実践家としての道を、最終的に歩ませるようにしたのは、慈愛深きその長兄の死であったのである。

### 例3 小倉金之助の場合

数学者小倉金之助は学問が好きで、中学卒業後は家出までして上京し、後には東大の選科生として化学を勉強していた。しかし、家業(回送船問屋)を見ていた祖父が病気でその再起が不可能になった時、家督相続者となっていた彼は、家を離れて好きな学問の道に励んでばかりいるというわけにもいけなくなり、後髪は引かれつつも、大学をやめざるを得なくなってしまった。しかし、大学をやめ、問屋の若主人として新しい人生を歩みつつも、好きな学問から全く離れてしまうという気にもなれず、数学はどちらかという、好きな物理学や化学を学ぶための手段としてやっていたに過ぎないのであったが、物理学や化学と違って実験もなく、在宅のままでできる学問として、林 鶴一先生の奨めもあり、今後は数学をやろうと決心した。以後その決心は持船の沈没、鉄道の敷設等による酒田港の価値の低下等により、家運にかけりが見え始めて来たことも手伝って、更に強固なものとなっていった。しかしもとはと言えば、祖父の死が彼に数学の道を歩ませる一番の切っ掛けを作ったものと言うことができる。

なお彼は体が弱かったのであるが、病身でも何とかできるものとして、後には数学のうちでも数学史、その中でも資料の集め易い日本の数学史を専攻するようになった。結局、彼は祖父の死で数学を、自分の病気で日本数学史をやるようになったのである。

### 例4 シュリーマン (H. Schliemann) の場合

シュリーマンは20才のころけがをした上に肺結核に罹り、そのために勤務先の食料品店は免職になってしまった。その後生活に困って病がやや良くなってから、ある事業所の雑役に従事していたが、収入が少なく、経済的には苦しい生活をしていた。しかし、生活が苦しければ苦しいほど、貧困に負けない不屈の勇氣と、何とかしてこの困窮を脱却し、経済的にゆとりのある生活をしようとする努力が発生し、そこで高給取りになるための手段として、外国語の勉強を思い立ったのである。

外国語の勉強は、彼のもともとの素質の上に熱心さが加わり、また外国語学習上の要領も次第に会得して、まず英語から始まって、後にはスペイン語、フランス語、オランダ語、ポルトガル語、ギリシア語、ラテン語、ロシア語、スウェーデン語、アラビア語にまで及んだ。

このように苦労して身に付けた多くの外国語が、事業の上で非常に役立ち、お蔭で彼はその後、莫大な資産を築き上げることができた。そこで彼は41才の

“……今や我国都鄙到る処として庠序の設けあらざるはなく、……特に女子教育の如きも近来長足の進歩をなし、女子の品位を高め、婦人の本性を發揮するに至れるは、妾等の大に欣ぶ所なり。されど現時一般女学校の有様を見るに其学科は徒らに高尚に走り、……以て権門勢家の令閨となるものを養うべきも、中流以下の家政を取るの賢婦人を出すに足らず。……夫れ世の婦女たるもの、人の妻となりて家庭を組織し、能く其所夫を援けて後顧の憂なからしめ、或は一朝不幸にして其所夫に訣るゝことあるも、独立の生計を営みて、毅然其操節を清ふせるもの、其平生涵養停蓄する所の知識と精神に困るべきは勿論なれども、妾等を以て之を考ふれば、寧ろ飢寒困窮の其身を襲ふなく、艱難辛苦の其心を痛むるなく、泰然として其境に安んずることを得るが為めならずんばあらざるなり。……妾等此に見るあり。曩<sup>さき</sup>日に女子工芸学校を創立して妙齡の女子を貧窶の中に救ひ、之に授くるに生計の方法を以てし、恒の産を得て、恒の心あらしめ、小にしては一身の謀をなし、大にしては日本婦人たるの任務を尽さしめんとす。……”<sup>1)</sup>

彼女の活動は、当時としては世の注目を大いに引く活動であったのであるが、彼女にこのような行動を起こさせるようにしたものは、愛する夫の死であったのである。

## 例2 フレーベル (F. Fröbel) の場合

フレーベルは幼時両親特に継母との間がうまくいかず、それも一つの原因となって、何かをした時、自分の行為を心の中では間違っていないと思いながら、両親から叱られることを恐れて隠し立てをしたり、尋ねられた時に平気でうそを言ったりなどということがしばしばあった。そのために両親からは更によく叱られ、揚句の果てには、弟妹たちと遊んでいて時に何かよくないことが起こると、決まって悪いことは何でも彼のせいになせられるようになった。

このような時にいつも彼を助け、彼が本当に誤りを犯した時でも、彼の本性のうちに清らかなものを認めて、保護してくれたのは長兄のクリストフであった。当時フレーベルは10才にも満たぬ少年であったが、その時以来フレーベルの心は、その奥底から長兄の心と固く結ばれるようになっていったのである。そしてこの愛情深き長兄が亡くなった時、それは20数年後のことではあったが、その恩に報いるために、その遺児を引き取って、立派に育て上げていくことを心に誓うとともに、自らの生涯も教育事業に捧げようと、最後の決心をしたのである。

なるほど、彼の教育についての本質的な考え方は、厳しいまでに徹していた父のキリスト教主義に基く日々の教えから得られたものではあるが、理論家で

# 自叙伝に見る行動の方向づけ、開始、 変容の外的要因の研究〔Ⅱ〕

町 田 恭 三

## 序

この研究は子供たちの行動指導上の参考として、有名人の自叙伝を利用し、彼らが歴史上に名を残すような大きなことを成し遂げるようになった、その行動上の機縁となったものは何であったかを探り出そうとするものである。前に父、母、教師、書籍の影響については記したので、今回はその他のものの影響について記してみることにする。

## 研究の結果

### 1 人の死や病気の影響

特に近親者の死や、自己を含めてその重い病気などに遭遇した場合には、時に行動に大きな影響が出てくるものである。

#### 例1 福田英子の場合

明治18年自由党大阪事件以来、自由党女流闘士として活躍していた福田英子も、業未だ半ばで明治33年彼女36才の時、夫福田友作と死別、人生最大の悲しみに当面することとなった。しかし、その悲しみの中で、遺児を健全に育て上げ、更には何か世のお役に立つ事をするところこそ、夫の愛に報いる最良の道と気を取り直し、新たな人生へと旅立ったのである。そして自らの悲しい経験から、女性も独立してやっていけるようにならなければならないが、女性の独立はまず経済的独立から始まらなければならないとして、さっそく婦女子に“実業的修養”を与えるために、亡夫の最初の命日に角筭女子工芸学校なるものを起こした。そしてまた、この学校を維持していく上から、その製品を買い上げてもらうための日本女子興産会を起したりして、一大活動を開始したのである。日本女子興産会設立に当たっての趣意書を見ると、その時の彼女の心意気がしのばれる。